

ケネディ劇における旅行者とツーリスト

伊藤ゆかり

Travelers and Tourists in the Works of Adrienne Kennedy

ITO Yukari

Abstract

We can see a strong longing for travel in many plays by Adrienne Kennedy. It is a longing for the transformation through travel. Her protagonists, who are often writers or would-be writers, leave their home country and travel or stay abroad in order to fulfill their wish. The audience find in them writers as tourists who visit their destination with eager anticipation and many literary images about the places. It indicates that people today are likely to travel not as travelers but as tourists who gain a lot of knowledge beforehand and gaze passively what they expect to gaze at their destination; Kennedy's writer characters are no exception. However, it is impossible for Kennedy's tourists to be satisfied with their experiences as tourists. They gaze and experience something that is completely opposite their anticipation or images. In addition, once they leave the home country, they cannot return there as the same person. Certainly they undergo some transformation, but it is not the transformation they have desired. On the contrary, they lose too many things such as their home and even their identity; they realize that they can no longer belong to any place.

キーワード：アドリアンヌ・ケネディ ツーリスト 旅行者 『フクロウが答える』『死をもたらす三つ子』

Key words: Adrienne Kennedy, tourists, travelers, *The Owl Answers*, *Deadly Triplets*

I

Adrienne Kennedy の作品において、我々はしばしば旅行への憧れや、他国における豊かな経験を語ることばを見出すことができる。創作における他国での経験の重要性を明確に示しているのは、最初の作品集における前書きである。収録されている劇の執筆へと導いた出来事として、ケネディは、ニューヨークでの生活のほかに、ガーナやローマ、ロンドンなどでの滞在を挙げ、さらに以下のように書いている。

Without exception the days when I am writing are days of images fiercely pounding in my head and days of walking...in

Ghana along the campus of Legion, in Rome through the Forum, in New York along Columbus Avenue, and in London, Primrose Hill (hadn't Karl Marx walked there?)...¹⁾

また、初めて活字になった作品「フランス国王がゆえに」“Because of the King of France” (1963) は、ヴェルサイユ宮殿を経てヴァージン諸島に住むようになった従兄についての詩的な短編小説である。そこでは、「なぜよりによってヴァージン諸島に」という、語り手の家族で冗談のように繰り返されていた言葉と、題名に含まれるフランスという国名が、語り手が感じているエキゾシ

ズムを示唆する。²⁾ 言うまでもなくケネディの作品において空間は常に非常に大きな意味を持つが、本論文においては、旅という観点から彼女の劇空間を考えていきたい。³⁾

Daniel J. Boorstin は、欧米社会、特にアメリカにおいて旅の概念がいかに変わったかを論じる中で、その変化が旅行者からツーリストへの変化だと述べている。旅行が高価で時には危険な活動であった時代においては、一部の限られた層のみが旅行に出かけた。彼らは旅行という冒険において、いくつかの苦難に出会いつつ、多くの知識を得て、故国に対する新たな視点を獲得した。旅行とは変化を遂げることだったのだ。⁴⁾ 旅することが元々骨を折って働くことを意味したのに対して、19世紀以降、旅行が安く安全になり、さらに旅行社の登場によって旅行が商品となってからは、人々はツーリストとなり、楽しみが用意されていることを期待する受身の存在として旅行に出かけるようになる。⁵⁾

我々がケネディの作品の中に見出すのは、ブーアスティンが語る旅行者への強い憧れである。たとえば、自伝的エッセイである『わたしの劇へとつながる人々』*People Who Led to My Plays* (1987) において、ベティ・デイヴィス主演の映画 *Now, Voyager* への強い愛着が繰り返し語られる。最初にこの映画が言及されるのは中学生時代を語る章である。映画を見て、海を渡る旅に出て別人のようになるのだという思いがわき起こったという。⁶⁾ さらに、大学時代にも、映画の中で鮮やかな変身を遂げる女主人公のように大洋を渡る船旅に出れば、どこにも属さないという気持ちは消えるだろうと考えた (91)。また、大学時代に未来の夫である Joseph と付き合っていた頃、彼は、ケネディが行ったことのないロサンゼルスやニューヨークについて話し、ふたりで旅に出る様子を描いてみせた、と書いている (71)。旅への思いが彼女とジョーゼフとを結びつけたのだ。このように旅によって変わりたいという要求は常にケネディのなかに存在している。そして結婚後の1960年に念願どおり、夫と子どもと共にエリザベス2世号に乗船し、アフリカに行くことにな

る。アフリカ滞在をきっかけとして帰国後ケネディが劇作家としてデビューすることを考えると、『わたしの劇へとつながる人々』は、ケネディの夢が実現されるハッピーエンディングの物語とみなすことができよう。

その一方で、ケネディは多くの作品においてツーリストを描いている。John Urry はツーリストが観光のために訪れる場所について、以下のように説明している。

Places are chosen to be gazed upon because there is anticipation, especially through daydreaming and fantasy, of intense pleasures, either on a different scale or involving different senses from those customarily encountered. Such anticipation is constructed and sustained through a variety of non-tourist practices, such as film, TV, literature, magazines, records and videos, which construct and reinforce that gaze.⁷⁾

アーリの論にしたがって冒頭に引用した作品集の前書きをみると、ケネディがマルクスやシルヴィア・プラスのゆかりの地に心躍らせる様は、まさにツーリスト、すなわちツーリストとしての作家像を浮かび上がらせることがわかる。同様の傾向が特に目をひく作品は、『死をもたらす三つ子』*Deadly Triplets* (1987) である。アメリカの黒人女性劇作家がロンドンに滞在中に巻き込まれた事件を描くミステリー「死をもたらす三つ子」“A Theatre Mystery: *Deadly Triplets*”、及び「演劇ジャーナル」“A Theatre Journal”から成るこの作品において、我々は、ケネディがロンドンにいかにか強い愛着を抱いているかを教えられる。そして、ロンドンの描写はしばしばツーリストが用いるような表現を伴うのである。前書きにおいて、ケネディは、ロンドン塔やテムズ川、プリムローズ・ヒルにかかる霧、タッソー夫人の蠟人形館、エリザベス女王などが彼女を魅了しつづけることを書いている。⁸⁾ さらに、コナン・ドイルや

アガサ・クリスティなどの英国作家の熱烈なファンであるためミステリー小説を書いたと説明し、文学的関心と英国への興味との強い結びつきをここでも明示する (vii)。ロンドンへの強い愛着はミステリーの中にも見られるが、注目すべきは、主人公の劇作家 Suzanne Sand がロンドンに住み始めた頃の喜びを、映画やテレビ番組との関連で語っていることである。すなわち、スザンヌがロンドンに到着した1967年は、ジェームズ・ボンドの映画やマイケル・ケイン、ピーター・オトゥールなどの俳優が活躍した英国映画の時代であり、ローリング・ストーンズやビートルズの時代であった、という説明が見られる (6)。それに加えて、住居をかまえたチャルコット・クレセントは、テレビドラマの『復讐者たち』*The Avengers* が撮影された場所であるため、2人の息子たちは胸を躍らせたと言う (9)。アーリが論じているように、テレビや映画に取り上げられた地を訪れる際、マスコミをとおして得た知識によって期待をふくらませ、なおかつ期待通りの場所を見出そうとするツーリストのまなざしがここにはあるのだ。

『三つ子』の第2部であるジャーナルにおいても、英国への憧れを形作ってきたブロンテ姉妹、チャールズ・ディケンズの小説、クリスマス・カードの絵柄などが列挙され、文学への愛情と英国への愛着との重なり合いが繰り返し強調される (106)。同時に、2度目にケネディがロンドンを訪れた際の思い出を以下のように語っている。

The city in February, the early darkness, walks in the rain excited me. It made me feel that just beyond that darkness was a completed person, a completed writer, a completed life. I feel the city held a key to my psyche. (105)

ここには、旅の地において自分は完成し、完全に作家となるのだという感覚が見られる。ツーリストとしてロンドンに滞在しながら、変化し、望みどおりの新たな自分、作家としての自分になる可能性を持つ旅行者への強い憧れを我々読者は見出

すのである。

ケネディが示すツーリスト像は、イメージや知識などをあらかじめ持たずに旅行先を訪れることはあり得ないことを我々に実感させる。旅行によって内面からの根本的変化を遂げる旅行者となることを、我々は時に夢見る。しかし、旅行先についての多くの情報が簡単に手に入る今日、旅行の目的地に着いてみれば、事前の情報と実際の目的地を比較することに忙しい。誰もがツーリストとして行動せざるを得ないことを、ケネディの作品は明示していると言えよう。一方、ケネディが手放しの喜びとともにロンドンやその他の国への愛着や思い出を語る様子は、文学への愛着ゆえとしても、我々をとまどわせるものがある。彼女の劇の中で主人公の苦悩を語る際の表現とあまりにもかけ離れているのだ。実際作品においてツーリストとして登場した人物は、劇が進行するにつれ一般的なツーリスト像から離れていく。つづいて、このツーリスト像のずれについて論ずることとする。

II

ケネディの最初の戯曲である『ニグロのおもしろ館』*Funnyhouse of a Negro* (1964) の中にも、ツーリストとのつながりを見出すことができる。表題にある「おもしろ館」は、クリーヴランドにある遊園地の中の出し物にヒントを得たもので、入り口の両脇にはグロテスクな笑いを浮かべた白塗りの道化師像が立ち、なかは鏡張りの壁または廊下があり、そこに映る客たちの像は歪んだものになるという。⁹⁾『ニグロのおもしろ館』という作品は、休日を楽しむために訪れた人々、すなわちツーリストたちがおもしろ館に入って観る劇だと考えられよう。主人公の Sarah 自身、おもしろ館に入った客なのかもしれない。ひとたび鏡に映った自分の歪んだ姿をみたセアラが、自身の中にあるさまざまな意識に苦しむ様子をケネディは劇にしたとも解釈できるのである。またセアラは、ほかの作品の主人公と同じように、英文学を専攻し、英国の詩人を真似て詩を書き、英国やヨーロッパに憧れる。英国への愛着のあらわれが巨大な石膏のヴィクトリア女王像であり、ヨーロッパへの

憧れは、「いつかヨーロッパの骨董品とローマの遺跡の写真がある部屋に住みたい」という台詞に表現されている。¹⁰⁾ 好きな外国に関連した物を置き、写真を飾るという行為は、異国の地へと旅立ちたい人間にとって当然の行為である。しかし、セアラの持つヴィクトリア女王の像は悪夢に出てきそうな恐ろしい像であり、一方ローマの写真は、コリンが指摘するように、崩壊した彼女の家族を象徴するような遺跡の写真なのだ。¹¹⁾ 『おもしろ館』におけるツーリストの要素は、すべて歪んでいるのである。

ツーリスト像の変型の異なる例として、ミステリー『死をもたらす三つ子』について考えたい。第一に、主人公スザンヌについてのロマンチックなミステリーならでは設定がある。彼女は、幼い頃養女として英国に住んだ経験があり、そのうえ養母が不可思議な死を遂げている。前途有望な劇作家として英国を訪れたスザンヌだが、いつしか養母の死の謎を解くためにロンドンに来たのだという隠れた動機を自覚するにいたる。彼女は、劇作家兼ツーリスト兼探偵となるのだ。テレビドラマや映画にありそうな設定であり、確かにスザンヌは映画のヒロインのように、謎を追ってアムステルダムまで赴く。そこでは国立美術館を訪れるといった観光を行なうにもかかわらず、ツーリストとしての興奮は描かれぬ。それは、アムステルダムにおける出来事のうち最も重要なのが、そこで観た2つの劇であることに由来する。ひとつは『フランケンシュタイン』を元にした劇であり、もうひとつはアンネ・カレーニナという芸名の女優による一人芝居である。前者は、怪奇小説から夢のようなイメージを作り出し、後者では女優が顔を隠して鳥を演じる。どちらも、観客に一部しか見せないことに重きをおいた舞台作りである。見るというツーリストにとって最も重要な行為が、制限されているのだ。スザンヌは、異国を楽しめないばかりか、見るべきであったもの、見たかったものが見えなかったという強い不安を抱いて英国に戻るしかない。

しかも物語はさらに先が見えなくなっていく。彼女は、妻をもつ人気俳優と恋におちるのだが、

恋人は精神状態が疑わしくなった末に休養のために訪れたイタリアで事故死する。彼が殺されたことや、その犯人が判明するのは、スザンヌがアメリカに戻ってしばらくしてからである。結局のところ、自らの幼い頃の謎は解けないまま物語は終わる。彼女は、ツーリストとしても探偵としても不完全なまま英国を去ったのだ。しかも、旅という言葉の語源どおりに苦労を重ねたにもかかわらず、知識や深い理解を得ることもなく、旅行者としても不完全なままである。

小説の冒頭と末尾において、スザンヌの現在が語られる。それは、ジョン・レノンが自宅のダクタ・アパートメントの前で殺された翌日である。そのアパートはスザンヌの家の近くであるため、彼女がそばを通りかかると、群集がろうそくや花を手立っている。ロンドンで会ったときのジョン・レノンを思い出しているスザンヌに、誰かが一輪の花を渡す(92)。いつの日かツーリストにとっての名所になる地で、彼女は地元の住民として振舞うことができない。遠くから事件の現場を訪れた人間のようにアパートを見つめながら、ツーリストにも旅行者にもなりきれずに異国の地で失ったものを思い出すのである。

他方、ケネディがロンドンからアメリカに戻ったきっかけは、精神に異常をきたした老女に、「もといいたインドに帰れ」と言われたことだと、「演劇ジャーナル」の末尾にある(124)。スザンヌ同様、もといいた場所に戻ったところでそこに属することはできないことを前提とした決意である。同じ「ジャーナル」の中で、作家のマイケル・ウェラーとロンドンで会った時、アメリカの状況や人種問題などを話題にしつつ、「居場所がないといつも感じてきた」とケネディが言うと、相手は「居場所があることに価値があるのか?」と返答した、というエピソードが語られている(112)。

ケネディの発言は、彼女が育ってきた環境を考えるとなおさら示唆に富む言葉である。彼女が子どもだった頃、生まれ故郷のオハイオ州クリーヴランドは、もっとも民主的な都市のひとつで、黒人、イタリア系、ポーランド系などさまざまな出身の人々が周囲にいたという。¹²⁾ 異なる民族的背景

をもった人々が、それぞれの居場所をもつことが可能なコミュニティだったのだ。しばしば言及されるように、ケネディが初めて黒人への根強い差別を体験したのはオハイオ州立大学に進学してからである。そこで彼女は居場所をもつことが許されない状況がありうることを認識する。人が皆どこかに属することができる世界から、ある人種しか属することが許されない世界へとケネディは移り、さらには、どこかに属することが意味をもたない世界へと移動したのだ。Kimberly W. Benstonが言うように、ケネディはもはや自らを特定の場所に位置づけることを拒絶するしかない。¹³⁾ そして、居場所に戻ることがツーリストや旅行者の前提である以上、その居場所をもたない者は、異国の地を何度訪れてもツーリストや旅行者にはなれない。ツーリストとして観光を楽しめきれず、旅行者として夢見た変化も遂げられなかったケネディとスザンヌは、このような自己認識を得る。その認識は、彼女たちがツーリストとして示すロンドンへの愛着や、旅行によって完全な作家になりたいという強い望みと対照的に冷ややかであるがゆえに、なおさら強い印象を読者に与えるのである。

III

ケネディ自身が最も好きな作品だという『フクロウが答える』*The Owl Answers* (1965) は、ツーリストの描き方において非常に興味深い作品でもある。¹⁴⁾ 普通のツーリストとして英国での旅を楽しみたいという主人公の願いが歪められていく様は、ケネディの全作品中最も暴力的といえよう。以下で、『フクロウ』におけるツーリストの描き方を考えたい。

劇の主人公は、Clara Passmore というジョージア州サヴェンナで教師をしている 34 歳の女性である。彼女は、町で一番裕福な白人男性と彼の家で料理女をしていた黒人女性との間の私生児で、黒人の牧師の養女として育った。黒人と白人の間、自らの出自と英国への憧れの間で苦悩するクララを描く、というのが劇の基本的な内容だが、実のところこのような説明はあまり重要ではない。『フクロウ』は、主人公が「クララ・パスモアで

あり処女マリアであり私生児でありフクロウである彼女」と設定されている作品である。¹⁵⁾ 『ニグロのおもしろ館』の主人公セアラも、彼女自身である複数の登場人物を持つが、ここでは複数の人物がかわるがわるクララを演じるのではなく、Carla J. McDonough が言うように、すべて同時に「彼女」なのだ¹⁶⁾。ほかの登場人物も同様に「牧師の妻でありアン・ブリンである私生児の黒人の母」や、「町で一番金持ちの白人であり死んだ白人の父でありパスモア牧師である罪深い父」であるし、舞台自体が「ニューヨークの地下鉄でありロンドン塔であり、ハーレムのホテルの一室でありサン・ピエトロ大聖堂」である (25-26)。そのような設定がされている劇において、主人公について何が事実でどれが彼女の想像なのかと問うことはあまり意味がない。そのことを前提としつつ、クララの旅について検証することとする。

劇が始まって間もなく、クララは白人の父とともにすごした英国でのひと時を次のように語る。

We came this morning. We were visiting the place of our ancestors, my father and I. We had a lovely morning, we rose in darkness, took a taxi past Hyde Park through the Marble Arch to Buckingham Palace, we had our morning tea at Lyons then came out to the Tower. We were wandering about the gardens, my father leaning on my arm, speaking of you, William the Conqueror. My father loved you, William... (27-28)

一見したところ父娘の楽しい観光の一日を語るようでありながら、徐々に 2 人のツーリストへの違和感を高める台詞である。朝から何をしたかを流れるように語る様子にどこか尋常でないものを感じていると、ウィリアム征服王への呼びかけとなり、違和感は決定的なものになる。さらに、クララは庭をふたりで散歩している途中でベンチに坐り、ベンチから立ったとたん、父親が倒れてそのまま死んだ、と語る。人々は父の死体をどこかに

運び、クララをロンドン塔に閉じ込めてしまう(32)。クララが実際に英国に観光旅行をしたことがあるかどうかはともかく、アメリカ南部の町における白人の父親の葬式について言及されており、父との観光旅行は彼女の空想のなかにしか存在しないことは確かである。

クララの空想上の観光は美しく、グロテスクでもある。それは父が突然死んでしまい、遺体は絹のような白髪をたらし靴もぬがされて運ばれていく、という繰り返される描写のせいもあるが、なによりも、クララが愛する英国において、とりわけ彼女が憧れる人物たちがその場に登場するゆえであろう。引用箇所では呼びかけられるウィリアム征服王だけでなく、チョーサーやシェイクスピアのような作家や、アン・ブリンらが登場人物なのだ。チョーサーらが登場し、クララが英国をブロンテ姉妹やディケンズの国と呼ぶことからわかるように、彼女も『ニグロのおもしろ館』のセアラ同様文学を愛する人間である。英国詩人をまねて詩を書いていたセアラに対して、クララは白人の父宛の手紙を書いているらしく、それをもとに論文を書こうと常にノートを持ち歩いている(42)。ところが、彼女はノートを何度も落とす。あたかも書くこと、書いたものを持ち歩くことがクララの能力を越えているかのようである。そして文学への愛を育てた敬愛の対象であるシェイクスピアたちは、ロンドン塔の守衛であり、クララを塔に閉じ込め、彼女を拒絶する存在である。劇は、父の遺体のもとに行こうとするクララに、「私生児め。お前は彼の祖先ではない。守衛よ、こいつを閉じ込めておけ。私生児め」と4人がしゃべるところから始まる(27)。閉じ込められた彼女は、父がどうなったかを見ることすらできない。アーリが指摘するように、ツーリストとはまなざしを向ける存在であると同時に、見つめられる存在である。¹⁷⁾にもかかわらず、観光に来たはずのクララは、見ることも見られることも禁じられ、部屋に監禁される。ケネディや『死をもたらす三つ子』のスザンヌと同じように、クララは文学を愛する者ならではの観光をするつもりだった。また、白人の父親の祖先は英国から来たと信じているクラ

ラにとって、祖先の故郷を訪ねる旅でもあった。しかし、彼女を英国に導いたといえる人々によって、ツーリストとしても、英国人の子孫としても否定されるという残酷な仕打ちにあうのである。

舞台設定においてもツーリスト像の強調と否定が同時に行なわれる。先に述べたように、この劇では、ヨーロッパの観光名所とニューヨークの地下鉄やホテルが舞台である。観光名所の方は、門や主要祭壇、ドームはサンピエトロ大聖堂に、壁はロンドン塔に似ているという設定である(26)。クララがバッキンガム宮殿やストラットフォードといった地名を台詞のなかで繰り返すことで、舞台設定と観光との結びつきはなおさら強調される。そこにニューヨーク、特に地下鉄が、電車が動く音、ドアの開閉の音によって英国の地に強制的に割り込んでくる。たとえば、ロンドン塔の門が閉まる音は地下鉄のドアが閉まる音であり、シェイクスピアたちは地下鉄の乗客でもある。さらに、クララが売春婦として利用するとされるハーレムのホテルの部屋は、大聖堂の主要祭壇という最も縁が遠いはずの場所と重なり合う。『ニグロのおもしろ館』においては、舞台をジャングルが支配すると混沌がもたらされたが、『フクロウが答える』の場合は常に舞台が混沌としている。それは最終的にはツーリスト像の否定へと向かう。考えてみればホテルと地下鉄は旅行のなかで最も利用頻度が高いと思われる場所だが、ここではツーリストとは関連づけられない。¹⁸⁾ それどころか、クララは母親に責められ、白人の父とのつながりを否定し、「わたしは地下鉄に乗って、ハーレムのホテルに行って愛しあう男を探す。父と同じ格好をさせ、わたしを連れて行くと頼む」と言う(37-38)。クララが本当に売春婦のような振舞いをしたのか曖昧だが、ついに彼女は空想の中でさえツーリストであることを許されなくなるのだ。劇の最後は、クララが黒人の男性とともにいるホテルのベッドであり主要祭壇である。ベッドも主要祭壇も燃え、クララはフクロウに変身する。ツーリストとしてのクララは否定されたまま劇は終わるのである。

『わたしの劇へとつながる人々』において、『フ

クロウ』を生み出すきっかけと思われる次のようなアフリカでの思い出が語られている。

The owls in the trees outside the Achimota Guest House were close, and at night, because we slept under gigantic mosquito nets, I felt enclosed in their sound. In the mornings I would try to find the owls in the trees but could never see them. Yet, at night in the shuttered room, under the huge white canopied nets, the owls sounded as if they were in the very center of the room.

I was pregnant again. And there were difficulties. I had to stay in bed for a week, as I bled. I listened to the owl sounds, afraid. (122-23)

このように厭わしく、恐れてさえいたフクロウへとクララが変身する場面はまさに衝撃的である。前述したように、ケネディには旅行によって完全に変わることへの強い願望が常に見られる。同時に、『わたしの劇へとつながる人々』では、狼男のような怪物に変身することへの恐れが繰り返し語られる。しかし、後者は、実のところ恐ろしい怪物になることへの好奇心や憧れと混じり合い、怪物への変身にケネディが魅了されていることを示している。¹⁹⁾『フクロウ』における変身は、恐怖が入り混じった彼女の憧れを実現したものであり、旅行によって変化を遂げるという望みはかなえられたことになる。ただし、フクロウになることでクララは言葉を失う。空間を見つめ、“Ow...oww.”と言うことしかできない(45)。旅行にあこがれ、書き続けることに執着したクララが、ツーリストとしてのまなざしを失い、さらには書けなくなる。文学を愛するがゆえに父との英国旅行を夢見たクララが、旅行によって文学を奪われるという皮肉な変身を遂げるのだ。

しかし、この残酷な変身の中に可能性を見ることが出来る。クララの母親は、「フクロウがお前の始まりだった」と語り(35)、また「フクロウの

国 owldom から通じる道がある」と言って、クララをフクロウの世界へと誘う(43)。一方クララは「わたしたちの王国に行きたいだけです」と神に訴えるのだが、結局のところクララの国とはフクロウの国なのである。男性の君主が支配する王国 kingdom に、白人の父に拒絶されたクララは入ることはできない。そして、この劇では白人の父は黒人の父でもあるのだから、彼女はふたりの父から拒否された以上、どんな場所かわからない混沌とした国であっても、フクロウの国に行くしかない。だが、少なくともそれは男性の支配からの解放を意味する。さらに、E. Barnsley Brown が論じるように、フクロウへの変身は、クララが出自のゆえに死に至るかわりに、黒人と白人という両極端の人種を超越することでもある。²⁰⁾

フクロウは、ケネディにとって昼になれば身を隠し、夜になれば執拗に現われる鳥である。つまり、決して追いつくことも殺すこともできない鳥なのだ。ケネディはアフリカでフクロウに悩まされたが、それが『フクロウが答える』のような劇を生み出したことを考えれば、フクロウとなったクララも何かを生み出すのかもしれない。クララは、ツーリストとして父と英国を楽しみたいという思いに裏切られ、文学を愛する思いも裏切られる。さらに、旅によって完全な人間になりたいと思ってもかなえられず、確かなアイデンティティを持つこともできない。それでも、彼女はフクロウという可能性として存在し続け、言語となる前の声を発し続けるのである。

注

- 1) Adrienne Kennedy, preface, *Adrienne Kennedy in One Act* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1987) ix.
- 2) Adrienne Kennedy, “Because of the King of France,” *The Adrienne Kennedy Reader* (Minneapolis: U of Minnesota P, 2001) 3.
- 3) 拙論「おもしろ館からオハイオ州へ—A・ケネディ試論—」(『山梨県立女子短期大学紀要』第34号、2001)では、ケネディにおける空間を論じた。
- 4) Daniel J. Boorstin, *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America* (1961; New York: Vintage, 1992) 115.
- 5) Boorstin 85.

- 6) Adrienne Kennedy, *People Who Led to My Plays* (1987; New York: Theatre Communications Group, 1988) 47. 以下、同作品からの引用はすべてこのテキストを用い、本文中の括弧内に頁数を記すこととする。
- 7) John Urry, *The Tourist Gaze*, 2nd ed. (London: Sage, 2002) 3. なお、本論文では、tourist の訳語に関して、本書の邦訳『観光のまなざし：現代社会におけるレジャーと流行』（加太宏邦訳、法政大学出版局、1995）に従い、「観光客」よりも広い概念を示唆する「ツーリスト」とした。
- 8) Adrienne Kennedy, preface, *Deadly Triplets: A Theatre Mystery and Journal* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1990) xi. 以下、同作品からの引用はすべてこのテキストを用い、括弧内に頁数を記す。
- 9) Philip C. Kolin, *Understanding Adrienne Kennedy* (Columbia, SC: U of South Carolina P, 2005) 35.
- 10) Adrienne Kennedy, *Funnyhouse of a Negro*, *Adrienne Kennedy in One Act* 6.
- 11) Kolin 33.
- 12) Wolfgang Binder, "A MELUS Interview: Adrienne Kennedy," *MELUS* 12,3 (1985): 101.
- 13) Kimberly W. Benston, *Performing Blackness: Enactments of African-American Modernism* (London: Routledge, 2000) 235.
- 14) Binder 104.
- 15) Adrienne Kennedy, *The Owl Answers*, *Adrienne Kennedy in One Act* 25. 以下、同作品からの引用はすべてこのテキストを用い、括弧内に頁数を記す。
- 16) Carla J. McDonough, "God and the Owls: The Sacred and the Profane in Adrienne Kennedy's *The Owl Answers*," *Modern Drama* 40 (1997): 387.
- 17) Urry 127.
- 18) 『フクロウが答える』において、旅行の移動手段はあまり言及されない。クララは、ケネディと同じようにエリザベス女王号で英国に渡るが、船の中でたった一人の黒人であったこともあり、船室に閉じこもり本を読んでいたという (36)。ケネディが夢中になったベティ・デイヴィスの映画では、航海がまさに変化を遂げるための旅だったことは対照的である。クララの旅が、望んでいたような変化をもたらさないことを示唆していると言えよう。
- 19) Marc Robinsonによると、ケネディはリドリー・スコットの映画のファンだという。彼の代表作のひとつが悪夢のような変身の映画『エイリアン』であることをロビンソンは指摘している。怪物への変身に対して感じる魅惑と恐怖とがここでも入り混じっていて、興味深い。またロビンソンは、『フクロウが答える』の登場人物は、名前の中に変身が組み込まれていると論じる。Robinson, *The Other American Drama* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 123.
- 20) E. Barnsley Brown, "Passed Over: The Tragic Mulatta and (Dis) Integration of Identity in Adrienne Kennedy's Plays," *African American Review* 35(2001): 292.